

※ 地域振興＜6次産業化認定者の取組事例＞23 ※

自社牧場産のジャージー乳から製造した乳製品で
地域の活性化を目指す！ 湧別町 有限会社 中谷牧場

農林水産省 北海道農政事務所北見地域拠点地方参事官室 もりや まなぶ
森谷 学



1. こだわりの「ジャージー牛」飼育

オホーツク管内湧別町計呂地（ゆうべつちょうけろち）地区の「有限会社中谷牧場」は、草地面積 360 ha、乳牛飼養頭数約 870 頭（ホルスタイン種約 760 頭、ジャージー種約 110 頭）、年間約 5,000t の生乳を出荷するオホーツク管内有数のメガファームです（写真 1）。

代表取締役社長である中谷友則さんは父から受け継いだ牧場を平成 15 年に法人化し、地区内で離農する農家の土地を取得して規模を拡大し、牧場スタッフとして離農者を雇用するなど、雇用確保・農地保全に貢献しています。

中谷牧場のこだわりは、牛に与える牧草を自社で生産・収穫し、粗飼料自給率は 100% を達成していること、良質な牧草を収穫するため、刈取り時期の計画を立て適期収穫に努めていること、牧草の生産・収穫のほぼ全てを自社完結、コントロールし、良質な牧草を与えることで、高い乳質を維持していることです。また、近隣の耕種農家と連携し敷料の



写真 1 有限会社中谷牧場

麦稈と堆肥を交換する等、耕畜連携で循環型酪農を構築するとともに、自家繁殖・自家飼育を実現しています。

中谷牧場ではジャージー牛を約 110 頭飼養していますが、中谷社長によると、ジャージー牛はホルスタインに比べ乳成分も良く、性格も人懐っこくペットになるくらい可愛いそうです（写真 2）。当初 2 頭の飼育から始め 15 年ほどで約 110 頭まで増頭し、ジャージー乳を安定的に確保出来るようになりました。ホルスタイン乳と合わせて乳業会社へ出荷していましたが、ジャージー乳の特徴を生かしたいとの思いから 6 次産業化に取り組むことにしたのだそうです。



写真 2 人懐っこいジャージー牛

2. ジャージー乳を使った乳製品開発から
工房オープンへ

ジャージー牛の生乳は乳脂肪分やタンパク質の含有量がホルスタイン乳よりも多く、上質で濃厚な味のアイスクリーム製造に適していると考えていた中谷社長は、製品化のタイ

ミングを伺いつつ6次産業化に向けた準備を進めていました。

そのような中、隣接する佐呂間町の廃校となった小学校の利用が可能であることが分かり平成30年6月に佐呂間町から土地と廃校になった小学校舎を借り受けました。平成31年1月には「オホーツク産ジャージー乳による上質アイスクリームとヨーグルトの製造販売事業」で六次産業化・地産地消法に基づく総合化事業計画の認定を受け、カフェを併設した乳製品加工場への小学校舎の改装と自社牧場で搾ったジャージー乳を使った加工品開発がスタートしました。



写真3 若里ジャージーミルク工房
ARVO(アルボ)

牧場経営及び乳製品加工品の開発にあたっては、家族の応援・協力が心強い味方となっています。牧場は三女夫婦が、乳製品の加工・新商品の開発等は四女夫婦が中心となり、それぞれのスタッフとともに担ってくれています。そんな家族・スタッフに中谷社長は全幅の信頼をおいています。

乳製品加工場の工場長は四女のご主人丸山洋平さんです。丸山さんは、義父の中谷社長から声をかけられ、酪農や乳製品とは無縁の生活からこの業界に入りました。道内外の工房で研修した後、家族やスタッフと試行錯誤を重ね、ジャージー乳の特徴を生かした「ジェラート」、「ミルク」、「ヨーグルト」、「プリン」など約15品を商品化し、令和3年8月

にはジャージーミルク専門のカフェとショップ「若里ジャージーミルク工房ARVO（アルボ）」（写真4）を本格的にオープンしました（「ARVO」は「特別」を意味するフィンランド語）。土日祝日だけの営業ですが、ジャージー乳のみを原料にした特別感と上質なジェラートなどを求めて、オープン当初から多くの地域住民や行楽客で賑わっています。

佐呂間町郊外の見晴らしの良い丘陵地に位置しており、教室を利用したどこか懐かしい雰囲気のエートインスペースがあったり、広いホールに平均台や遊具等を配置して小さな子供が遊べるようにしてあったりと、旧小学校という構造を生かした工夫がされており家族連れが多く来店しているというのも納得です。



写真4 ARVO（アルボ）内ロビー

3. 今後の課題と目標

中谷社長が長年温めてきた自社牧場のジャージー牛から搾ったジャージー乳を原料とした乳製品の加工・販売事業は始まったばかりであり、製品を販売していく手段が課題となっています。中谷社長は、通販サイトやふるさと納税返礼品にも取り組んでいますが、商品が良いものと評価されても売れないと生き残っていけないため、定期購入につながるプ

ランの提示など、自社でしっかりと売る力をつけ、販路を拡大していかなければならないと考えています。

また、今後牧場や乳製品加工場の衛生管理等を含めた生産基盤を固め、5～6年後を目途に海外への輸出も視野にいとっていると、販売拡大の意欲を語ってくれました。



写真5 ジャージー乳のアイスクリーム

4. 地域を守り、地域を活性化するために

中谷牧場がある湧別町計呂地地区は紋別市・網走市・北見市へ通じる分岐点となつて

おり、交通の要衝です。以前は、食料品や日用品を取り扱う商店が3店舗ありましたが、最近2店舗が閉店し、地区内の住民たちはもとより、牧場のスタッフ約20人と家族も買物弱者・買物難民になってきました。こうしたことから中谷社長は、自分たちも地域の人たちも買物が出来る店があればと考え、閉店した一つの店舗を引き受け、食料品やお菓子、冷蔵品・冷凍品等の自動販売機のための24時間営業の無人店舗（店舗名：ARVO 24H STORE）を5月にオープンしました。その店舗ではARVOの商品も販売しています。

中谷社長から6次産業化への思い、地域への思いを聞かせていただき、その発想力と行動力でこの地域が活性化していくことを期待しています。

初夏の行楽シーズンもすぐです。佐呂間町の「ARVO」と湧別町の「ARVO 24H STORE」へ是非足を運んでみてください。